

『 励ましと慰め、そして勇気 』

使徒の働き 28章 11～20節

青木 信太郎 牧師

◆ 主の励まし

パウロのローマ行きの計画は聖霊なる神様が与えられたご計画でありました(19章21節、23章11節)。パウロのローマ到着が今朝のテキストで果たされます。それはパウロによるローマ宣教の始まりであり、当時世界の中心である帝国ローマから福音が広がって行くのです。今朝のテキストにおいても、パウロの姿を私たちの教会と重ねながら共に教えられたいと思います。【11-14節】既に確認してきたように、当時の地中海では渡航禁止の季節に入っていましたから、そこでマルタ島に辿り着いたパウロと乗船者たちはここで越冬して春を待ったわけです。このマルタ島で同様に冬をやり過ごして春を待っていた船がありました。船首にシンボル「デオスクロイ」という異教の神々の飾り(航海の守護神)があるアレキサンドリヤの船です。アレキサンドリヤから小麦などの穀物をローマに輸送する大きな船であったと思われます。パウロ移送の航海が再開されることになりました。マルタ島を出帆すると船は北北東150km先のシチリア島(シシリア)第一の都市シラクサに寄港します。ここで船は三日間停泊し、順風を待ったのでしょう。そして船は出帆して更に北上します。更に北へ130km、ブーツ(長靴)の形をしたイタリア半島のつま先に位置するレギオンに寄港します。【一日たつと、南風が吹き始めたので】と記されているように、折に叶って吹いてきた南風に乗って船は翌日にはレギオンから320km北上したポテオリに入港するのです。ここでパウロ一行、護衛のローマ兵は船を下ります。14節で【こうして、私たちはローマに到着した】と著者ルカが記しています。ポテオリ港からローマまでは陸路によって移動し、囚人パウロのローマ移送の旅が今ここで完結したのです。

いかがだったでしょうか？これまでの困難続きの航海の旅と違い、今回はとてもあっさりとした内容、しかも特段大きな出来事も記されていないパウロのローマ到着、なんだかあっけないフィナーレのように思えます。しかしここにとっても重要な意味を私たちは見出すことができるのではないのでしょうか。確かにこの航海の旅は困難の連続でありました。しかし今日のテキストでマルタ島出帆後はシラクサ、レギオンまで順風。そしてレギオンからは一日で300kmも進み行きポテオリに到着。本当に順風満帆な旅の最後でした。このことから確かに覚えることができることは、主は困難の後に順風を与えられるお方であるということです。私たちの人生、そして教会の歩みは時に困難の連続のように思えるかもしれませんが。しかしその歩みは困難だけではないということです。主なる神様は順風の中を歩ませてくださるお方でもあるということをお心に留めたいのです。困難を受け入れて主の導きと守りを堅く信じて歩む教会に、驚くほどに順風満帆なプロセスも与えてくださるのです。私たちはここに主の励ましがあることを覚えたいのです。

◆ 主の慰め

主なる神様は励ましと共に慰めをも与えてくださるお方です。最後に船を下船したポテオリではパウロを待っていた人々がいました。【14節】この港町にはキリスト者たちがいたようです。【ここで、私たちは兄弟たちに会い、勧められるままに彼らのところに七日間滞在した】とルカが記していますが、“兄弟たち”とはキリスト者(クリスチャン)の群れを指しています。つまりパウロが到着する前から既にイタリアには福音が伝えられていたということです。例えばペンテコステにおいて、使徒たちが様々な国の言葉で福音を宣べ伝えたその場所に、ローマからエルサレムに上って来ていた人々がいたことが記されています(2章10節)。ディアスポラと呼ばれる離散のユダヤ人も含めて当時、ローマには多く

のユダヤ人(4万人近い)が住んでいました。巡礼のためエルサレムに上り福音を信じて受け入れた者や、逆に迫害によってローマに逃れたキリスト者たちも多くいたことでしょう。今、パウロがイタリア半島のポテオリに到着して、そこで囚人にも関わらず七日間の滞在が許されて、現地のキリスト者との交わりが許されたのでありました。それだけではありません。ポテオリからローマへの陸路の途中、ローマから幾人もキリスト者たちがパウロを迎えに来ました。【15節】一つのキリスト者の群れはローマから69km離れたアピオ・ポロという宿場町でパウロを待って歓迎しました。もう一つのキリスト者の群れはローマから53kmほど離れたトレス・タベルネという宿場町に来てパウロを出迎えてくれたのです。恐らくパウロがまだ一度もあつたことのない人々でしょう。パウロが記したローマ人への手紙は、第三回伝道旅行の途中おそらくコリント滞在中に未だ見ぬローマの信徒、教会へ書き綴った手紙です。ローマ宣教への召命と意欲に燃えつつも、先ずはエルサレムに帰らねばならない状況で手紙を記してローマのキリスト者を励ましたのです。ローマの兄弟姉妹はパウロが書き送った手紙を既に受け取って読んでいたことでしょう。伝道者パウロ、教会の指導者パウロの到着を待ち望んでいた多くのキリスト者がパウロを出迎えたのです。ローマに到着するパウロは主による励ましに加えて大きな慰めを得たことでしょう。

私たちの教会を覚えて祈ってくださっている多くの兄弟姉妹がおられることを覚えましょう。私たちの教会の歩みのために献金をも捧げてくださっている事を忘れたくないのです。私たちの教会の宣教と成長のために祈り、捧げてくださる信仰の友がいるとは何と大きな慰めでしょうか。

◆ 勇気が与えられるとき

15節で多くのキリスト者の出迎えを受けたパウロは神に感謝しました。そして勇気が与えられたのです。ローマ到着で終わりではありません。使徒の働きの最後は、カイザルへの上訴の出来事は一つ記されていません。パウロがローマで宣教している内容で終わるのです。【16節】パウロは囚人の身でありましたが、非常に寛大な環境で軟禁されていたことが分かります。とは言え自由に町を出歩くことは出来ません。そこでパウロはユダヤ人の人々に自宅を訪ねてもらおうよう要請しました。【17-20節】ここでパウロが住む家に集まってきた“ユダヤ人の主だった人たち”とはユダヤ人共同体の中心的役割を担う指導者たちのことです。つまりキリスト者ではなく、ユダヤ教に留まっている現地の指導者たちのことです。集まってくれた彼らに対してパウロはここまでに至った経緯を端的に説明しました。特にパウロが強調していることは、カイザルへの上訴はユダヤ人たちを訴えるためではなくて、むしろローマへと到着するためであったということです。何のためにローマに到着したかったのか？それは【20節 私はイスラエルの望みのためにこの鎖につながれているのです】とパウロは語っています。パウロがローマに到着して最初にしたことは、これまでと同じように同胞ユダヤ人への伝道でした。パウロは先ず同胞ユダヤ人に対して、父なる神様が旧約聖書の預言者たちに示されたイスラエルの希望、真の王であり救い主イエス・キリストのことで、私は今このような囚われの身でここに来たと伝えたのでした。

励ましと慰めを得て勇気が与えられたパウロは、ローマでは先ず同胞ユダヤ人への伝道に着手したのです。私たちの教会にも主は励ましと慰めを賜ってくださいます。励ましと慰めを得た教会は勇気が与えられてイエス様の十字架と復活を証しするのです。パウロがこれまで同様、先ず同胞に福音をもたらそうとしたことは忘れてはなりません。先ず私たちがイエス様を伝えるべき人々とは誰でしょうか。それはあなたの最も傍にいる家族であり友人であるというチャレンジを得たいのです。先ず伝えるべき人をパウロは意識していました。おひとりおひとりに今、示される隣人を心の中で確認することが出来れば幸いです。勇気が与えられて私たちは、先ず伝えるべき人にイエス様による救いを伝えたいのです。イエス様の十字架と復活による救いを証ししたいのです。そして皆さんで共にその方の救いのために祈ってまいりましょう。